

---

# 居場所。

庵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

居場所。

### 【コード】

N0909BA

### 【作者名】

庵

### 【あらすじ】

小学時代のほとんどを一緒に過ごしてきた庵と拓馬が中学校に入学する。野球が大好きでお互いを尊敬しあっている二人が送る学生生活。

幼くて、不器用で、それでもまっすぐな二人を描きました。

この作品は作者自身が中学生のときに書いたものをもとに修正をくわえたものです。作者自身の処女作であり、投稿初作品です。

少くとも多くの方の目にとまれば、と思います。

はじまり。

「私、夢があるんだ。拓馬 たくま は」

「夢って何。でっかい夢。それともすぐその手の届きどうな目標のこと」

「手が届きそうって、目標っていつの」

伊瀬庵 いせ いおり

淡い薄紅色の花弁。ひらひら舞っていた。まるでドラマの一場面のように。臭い舞台が整っていることに私は思わず笑ってしまった。今日は入学式だった。私は大きな桜の木の下にたっている。初めて袖を通した新品のセーラー服はやはりぶかぶかだった。靴も大きめで歩きにくい。歩きたびに足もとを抜けていく風に気分が落ち着かなかった。スカートの丈を目いっぱい長くしてもらったのだが、それでも気に入らなかった。これで私が笑っていたら俳優までそろったということになる。でも生憎の腐れ顔だった。

「庵」

私の顔をふくれっ面にさせている春風に乗って、聞きなれた声が届けらる。

「拓馬」

振り返らずともその声の主はわかっていった。賀川拓馬 かがわたくま もう随分と長い付き合いだ。長いというと笑われるかもしれない。私たちが今日晴れて進学するのは中学校だ。

「そろそろ教室に行ったほうがいいんじゃない。お嬢さん」

「お互いさまでしょ。制服ぶかぶか」

そこでようやく私は笑った気がする。

「それもお互い様だよ」

「女はスカートってだれが決めたんだろう。本当に嫌だな。私生徒

会長にでもなるのかな」

「まだ式も始まってないのに何言ってるんだよ。行くぞ」

歩きざまに私は腕を掴まれた。それに驚いて私は思わず声を荒げた。腕は勿論振り払っていた。

「あつ、わりい」

ばつが悪そうに拓馬がその右手を背中にもわした。

「いや、こつちこそ、ごめん。いきなりだったから驚いて」

ずっと見てきたその姿が顔が征服を来ているというだけでこんなにも気がまえるものなのだろうか。

「つつい、な……行くこうぜ」

「うん」

賀川拓馬

俺が突如見せた顔は強張っていた。俺が俺の笑顔を一瞬でもぎ取ったのだ。その罪悪感に気の利いた言葉のひとつも出てこなかった。

「つつい、な……いこうぜ」

「うん」

相槌がやけに寂しく聞こえて、早くこの場から立ち去りたかった。

「俺、教室まだ確認してないんだ。俺は」

「まだまだよ。見に行こう」

一瞬の出来事をなかつたことにしようとお互い必至だった。始めてみるスカート姿の俺がやけに小さく見えた。中学入学が近付くにつれて俺の表情はだんだんとなくなっていった。それは俺を含めて当時の少年野球チームの同級生全員が感じていた。俺がこの中学校で何を重点的に生活していくのか俺にはわからなかった。共用はけしてできない。だから何も言わないけれど、俺は望んでいた。

またお前と野球がしたい。

俺たちはようや外履きから上履きに履き替えた。自分の下駄箱を探

すことに随分と戸惑った。自分の身長を優に超えるその中から小さな箱に書かれた小さな名前を一つ一つ見ていったのだ。そうして玄関のすぐ目の前に張られていたクラス票に目をやった。

「あっ」

「何」

俺が突き出していた人差し指の上下動が止まった。

「私2組。拓馬1組だ」

「そっか」

「別々、初めてだね」

「なんか変な感じだな」

「私、何の根拠もないんだけど、中学校でも拓馬と同じクラスになるんだとばかり思ってた」

「腐れ縁だからな」

小学校の6年間と小学校3年生からの少年野球時代をずっと一緒に過ごしてきた。幼稚園まで一緒だった。別々の教室に入って行った時とても不思議な感覚だった。

渡り廊下で別々の教室の扉に手をかけて別れる際初めて俺の姿をまじまじと見た気がする。履きなれないスカートからのぞく足は本当に細くて、少年野球時代に鍛えた筋肉が小さくぽっこりとうかんでいるだけだった。細い首から繋がる肩もまた、折れてしまいそうなほど細く見えた。今までだぼだぼの男の子用の私服姿と野球着の姿した記憶になかった。中学にあがったばかりの俺の体が完成しているはずもないが

、それでも圧倒的な体格差があるように思えた。

「なら、またね」

「ああ」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0909ba/>

---

居場所。

2012年1月2日01時49分発行